様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２３日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９３３００４３
研究課題名（和文）20 世紀イギリスの経済社会改良思想：ニュー・リベラリズムからニュー・レイバーへ

研究課題名（英文）A Study of Thoughts on Improvement of Economic Society in 20th Century Britain: From New Liberalism to New Labour

研究代表者
関　源太郎（SEKI GENTARO）
九州大学・経済学研究院・教授
研究者番号：６０１１７１４０

研究成果の概要（和文）： 20 世紀イギリスの経済社会改良思想は、19 世紀末に古典的リベラリズムの時代的限界を打破するべく登場したニュー・リベラリズムの形成とその後の戦前・戦後における多様な展開、1980 年代の一時的消失、20 世紀末の再生という動的過程を基軸に理解することができる。その際、特に注目すべきは、①ニュー・リベラリズムの形成はリッチーの社会進化論が大きな契機となったこと、②その展開は戦前・戦後期のマーシャル、ピグー、トーニー、ウェッブ夫妻、ケインズらの経済社会改良思想にも伺うことができること、③1980 年代サッチャー政権下で消失した観を呈した経済社会改良思想におけるニュー・リベラリズムの伝統は、サッチャー政権の諸政策を推し進めようとしたメジャー保守党政権が新たに提起した市場への政府介入を推し進め、新らたに変化した時代環境に適用したニュー・レイバー労働党政権によって 1990 年代末に再生されたということである。

研究成果の概要（英文） We can better understand the historical process of the British thoughts on improvement of economic society in the twentieth century than ever, if we investigate it in terms of the formation, the various developments both before and after the Second World War, the temporary disappearance of the 1980s and the revival in the late twentieth century of the new liberalism which emerged to cope with the difficulties the classical liberalism faced in the late nineteenth century. And we would emphasize the following three points in particular; (a) that Ritchie's theory of social evolution marked an epoch in the formation of the new liberalism; (b) that we could see a variant of its development in the thoughts on improvement of economic society of Marshall, Pigou, Keynes and the Webbs; (c) that while the Thatcher governments appeared to eliminate the British tradition of new liberalism in the thoughts on improvement of economic society in the 1980s, New Labour revived this tradition in the newly changing circumstances of the late 1990s through furthering and adapting to these new circumstances the idea of

governmental intervention in market which the Major governments advanced in order to try to propel the Thatcherite policies forward in the 1990s.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	3,000,000	900,000	3,900,000
２００８年度	2,900,000	870,000	3,770,000
２００９年度	2,300,000	690,000	2,990,000
２０１０年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総　計	11,100,000	3,330,000	14,430,000

研究分野：経済思想史、経済学史
科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想
キーワード：20 世紀、イギリス、経済社会改良思想、ニュー・リベラリズム、ニュー・レイバー

１．研究開始当初の背景

（１）　20 世紀イギリスの経済社会改良思想の研究は、1970 年代まで資本主義と社会主義との対立という図式のなかで行われてきた。その限りで、19 世紀末に形成され、20 世紀にさまざまな形態をとりつつ展開してきたニュー・リベラリズムの経済社会改良の思想は、社会主義的なそれのなかに埋没させられ理解されてきた。政治的・社会的・経済的自由の主張を基本としながらも、そのためにこそ国家介入・政府力介入が必要だと主張するニュー・レベラリズムの経済社会改良思想は、社会主義的な社会改良の亜種ないし敵対者として見なされていた。そうした研究状況のなか、1978 年に出版された Peter Clarke, *Liberals and Social Democrats*, Cambridge University Press.は、ニュー・レベラリズムを一個の独自な思想として全体の思潮のなかに位置づけるという方向性を示唆した点で画期的であった。さらに同年に刊行された Micheal Freeden, *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform*, Clarendon Press も、同様の意味で注目すべき業績であった。それ以来経済社会の改革思想としてのニュー・リベラリズムの研究は J. A. ホブスンや L. T. ホブハウスらを中心に本格化したが、その焦点は政治思想に置かれ、経済思想については軽視されがちであった。もちろん、Peter Clarke, *Keynesian Revolution in the Making*, Clarendon Press, 1988; Michael Freeden (ed.), *Reappraising J. A. Hobson: Human and Welfare*, Routledge, 1990 などに窺われるように、やがてニュー・リベラリズムの観点から経済思想の掘り起こしに着手された。しかし、なお十分とは言えないし、特に戦後の経済改良思想については手薄である。

（２）　研究の射程を戦後にまで広げ、20世紀全体を問題にした場合、とくに国内では服部正治・西沢保編著『イギリス100年の政治経済学－衰退への挑戦－』ミネルヴァ書房、1999年、国外ではRoger Middleton, *Charlatans or Saviours? Economists and the British Economy from Marshall to Mead*, Edward Elgar, 1998が注目される。前者は、19世紀末の大不況期から1990年代末のサッチャーリズムの時代までをカバーし、それらを形成する各時期のイギリス経済とその問題点を明るみに出しつつ、各論者たちはいかにこれに対処したかを解明したものである。それを貫く赤い糸は、イギリスの「衰退への挑戦」である。その意味では、20世紀イギリスの経済社会改良思想の積極的な側面を必ずしも十分評価しているとは言えない。後者に関しては、大いに学ぶべき点も多いが、経済社会改良思想全体が視野に納められているとは言い難いし、ニュー・リベラリズムの思想について十分自覚的だとは言えない。

２．研究の目的

このような研究状況を踏まえ、20 世紀イギリスの経済社会改良思想について、19 世紀末に形成されたニュー・リベラリズムの思想の動的展開過程を基軸に据えたうえで、現代のニュー・レイバーまでの歴史過程を跡づけ再評価することが、基本的な研究目的である。

（1）まず、戦前について、古典的なリベラリズムの思想からいかにしてニュー・リベラリズムの思想が形成されてきたかを、特に「進化論」に注目して明らかにする。さらに、このニュー・リベラリズムの展開がどのような歴史過程を辿ったかを究明する。その際、当然、その中軸をなしたと見なされてきたホブスンやホブハウスのみではなく、一方でケンブリッジ学派を形成した A. マーシャルや A. C .ピグー、J. M .ケインズについてもニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の展開との関連で再検討する、また他方で、R. H. トーニーやウェッブ夫妻らの社会主義者たちを同様にニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の展開という文脈のなかで再吟味する。こうして、この時期における経済社会改良思想の展開に対してニュー・リベラリズムが持った歴史的意義を浮き彫りにする。

（2）さらに、戦後においては、ウェッブ夫妻によって培われた LSE の行政学についてニュー・リベラリズムの観点から接近する。くわえて、戦後の労働党政権が党是として「計画化経済」を掲げながら、それを実施しなかった（出来なかった）歴史的、思想的事情を 1930 年代に遡り解明している Richard Toye, *The Labour Party and the Planned Economy 1931-1951*, Royal Historical Society, 2003 の示唆を基に、戦後の労働党の経済社会改良思想とニュー・リベラリズムとの関連を究明する。この点は、サッチャーリズムが席巻した1980年代および1990年代前半を経て、1990 年代末には労働党のなから生まれてきたニュー・レイバーの経済社会改良思想のなかにニュー・リベラリズムの伝統の再生を探ることによって受け継がれる。

こうして、20 世紀イギリスにおける経済社会改良思想の歴史的展開を、前世紀末に誕生したニュー・リベラリズムの形成・展開・変質・外観的消失・再生を基軸に動的過程として理解する。

３．研究の方法

（1）取り組むべき個別的研究課題を研究代表者および各研究分担者間で割り当てる。すなわち、高哲男は、A. スミスをはじめ古典派経済学のリベラリズムとダーウィンや H, スペンサーらの社会進化論の展開を検討することによって、ニュー・リベラリズムの形成、つまり古典的リベラリズムからニュー・リベラリズムへの移行過程について解明する。姫野順一は、世紀転換期から特に戦間期にいたるニュー・リベラリズムの展開における社会経済改良思想について、他の諸思潮と合わせて、ホブンスン、ホブハウス、トーニーらを中心に再検討する。岩下伸朗は、主にマーシャルとピグーの経済社会改良思想を問題にし、彼らの思想および理論とニュー・リベラリズムの経済社会改良思想との差異と関連を明らかにする。荒川章義は、ケインズ革命の問題を再検討する。つまり、確立革命のもとでの「統治」技術の転換およびケインズの「管理」の思想と理論について再吟味する。江里口拓は、ウェッブ夫妻と LSE の行政学に基づく経済社会改良思想を取り扱う。特に、ウェッブ夫妻におけるスペンサーの社会進化論の社会制御論として受容およびその後の LSE における行政学的経済社会改良思想とアメリカの公共選択理論との差異を究明する。さらに、それを通じて、ウェッブ夫妻および LSE の経済社会改良思想をニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の展開あるいは変質として理解する。関源太郎は、ニュー・ライト（ネオ・リベラリズム）とニュー・レイバーの経済社会改良思想を取り上げる。1960 年代より意識されていたイギリス経済社会の行き詰まりを明確に打破すべく登場したサッチャーリズムの支配によって消失されたニュー・リベラリズムの伝統が、ニュー・レイバーの現状認識や思想、諸政策によって再生されたことを解明する。

（2）本研究グループで比較的手薄であるが、課題の遂行上必要な 20 世紀イギリスの経済史・政治史の専門研究者であるロジャー・ミドルトン（ブリストル大学）、アラン・ブース（エクセター大学）、ニール・ロリングズ（グラースゴウ大学）、リチャード・トーイ（エクセター大学）の協力を得る。そのうえで、これらの個別的な課題の研究成果をたえず研究会や国際ワークショップにおいて相互に付き合わし全体として首尾一貫したものへと仕上げるように努める。

４．研究成果

（1）古典的リベラリズムの時代的な行き詰まりからニュー・リベラリズムが形成されてきた歴史過程について、これまで主に経済論や政策論の側面から明らかにされてきたが、その哲学的側面からの解明を新たに社会進化論の展開として行った。その結果、人間の道徳感覚も自然淘汰によって説明するダーウィンの進化論に影響を受けた D. C. リッチーの社会進化論は、自由を拡大するために国家による規制・統制も必要だとするニュー・リベラリズムの思想へと古典的リベラリズムの思想を転換させることになった点が改めて明らかになった。

（2）マーシャルの「生物経済学」についてよく知られてきたが、これまでその具体的内容に立ち入って検討されることはまれであった。この点を本格的に取り上げると、マーシャルの「生物経済学」には進化論的思考が刻印されており、その論理展開は主著『経済

学原理』から後続の『産業と交易』にまでたどることによって初めて十全に理解できることが明らかになった。

（３）同様に進化論的思考を内在させていたホブスンのニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の見地から、自由帝国主義者（ゲレイ、アスキス等）、キリスト教社会主義者（トーニー）および正統派経済学者（マーシャル、ニコルソン、ピグー）などの社会福祉概念についても比較検討した。その結果、多くの論者が、ある意味でニュー・リベラリズムの思想的属性を共有していることが判明した。この事実から明らかになったことは、戦間期のニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の展開には多様性が見られ、この点を重視することによって初めて経済社会改良思想の展開を十全に考察することができる点である。

（４）こうした多様な展開を見せたと思われる戦間期のニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の展開をケインズおよびウェッブ夫妻に焦点を当てて吟味すると、ケインズ革命と呼ばれる経済思想史上の革命は、確立革命という科学史における革命の副産物であったことが明らかになった。さらに、ウェッブ夫妻については、彼らの福祉国家論は国際競争を視野に納めつつ国内効率の改善を目指していたが、それは、内需主導型のケインズ主義の影響力の強さ故に、イギリスでは根付かず、むしろスウェーデンにおける福祉国家として開花したことが明確になった。

（５）1980 年代以降の展開について子細に吟味すると以下のことが明らかになった。1980 年代におけるサッチャーリズムの支配を引き継ぐ形で発足したメジャー保守党政権は、サッチャー保守党政権の諸政策をいっそう展開しようとした反面、そのことが政府による市場への介入を復活させた。さらにそのもとでのミクロ政策およびマクロ政策の一部は、ネオ・リベラリズムの諸政策を実施したサッチャー政権に対抗したニュー・レイバー労働党政権によって精緻化され系統化されたことが明確になった。さらに、ニュー・レイバー政権の経済社会改良思想は、現代の時代環境の変化のなかでのニュー・リベラリズムの思想的伝統の適用しようとしたことが明らかになった。

したがって、以上を通して、20 世紀イギリスの経済社会改良思想はニュー・リベラリズムの思想を軸に理解できると結論してよいように思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 荒川　章義、アマルティア・セン、根井雅弘編著『現代経済思想　サムエルソンからクルーグマンまで』（ミネルヴァ書房）、査読無、２０１１、１６５-１８２
② 荒川　章義、制度の経済学的主体とその基礎、八木紀一郎他編『進化経済学の諸潮流』（日本経済評論社）、査読無、2011、41-60
③ 江里口　拓、ウェッブ夫妻とスウェーデン―「国民的効率」からメイドナー・モデルへ、社会福祉研究、12巻、査読無、2010、1-11
④ Gentaro Seki、The Significance of New Labour's Thoughts: With Special Reference to Its Economic Views in the 1990s、経済学研究（九州大学経済学会）、76巻1号、査読無、2009、27-43
⑤ Taku Eriguchi、The Webbs, Public Administration and the LSE: the Origin of Public Governance and Institutional Economics in Britain、History of Economics Review (History of Economic Thought Society of Australia)、No. 50、査読有、2009、17-30
⑥ 江里口　拓、ウェッブ夫妻における「国民的効率」の構想－自由貿易、ナショナル・ミニマム、LSE－、経済学史研究、50 巻 1 号、査読有、2008、23-40
⑦ 江里口　拓、福祉国家形成期における社会理論の一断面－ビアトリス・ウェッブの「応用社会学」とスペンサー、愛知県立大学文学部論集、査読無、50 巻、2008、1-25
⑧ 荒川　章義、一般均衡とゲーム理論、根井雅弘編『分かる現代経済学』（朝日新聞社）、査読無、2007、35-65
⑨ 高　哲男、アダム・スミスにおける本能概念の生物学的基礎、商経論叢（神奈川大学）、査読無、43 巻 1 号、2007、113-153

〔学会発表〕（計 19 件）

① Eriguchi Taku、Theory of the Webbs on National Minimum and the Future of British Economy、History of Economic Thought Society of Australia、2010年7月9日, University of Sydney
② 姫野　順一、「言葉の束」としての 20 世紀初頭の「自由帝国」思想:アダム・スミス解釈の分岐として、経済学史学会第７４回大会、2010 年 5 月 22 日、富山大学
③ Eriguchi Taku、The Webbs, Public Administration and LSE: an Origin of Public Governance and Institutional Economics in Britain、History of Economic Thought Society of Australia、2009年7月9日、University

of Sydney
④ Taka Tetsuo, An Instinct as a Foundational Concept in Adam Smith's Social Theory, Smith in Glasgow '09 at University of Glasgow Adam Smith Research Foundation, 2009年4月1日、University of Glasgow
⑤ 江里口　拓、19-20 世紀転換期における救貧法改革をめぐる思想－ボザンケ、マーシャル、ウェッブ、初期ベヴァリッジ－、経済学史学会第72回大会 2008年5月25日、愛媛大学
⑥ 江里口　拓、ウェッブ夫妻のナショナル・ミニマム論と自由貿易、経済学史学会第71回大会、2007年5月27日、九州産業大学
⑦ 岩下　伸朗、マーシャル『産業と交易』の進化経済学、経済学史学会第71回大会、2007年5月26日、九州産業大学

〔図書〕（計3件）
① 姫野　順一、J. A. ホブスン　人間福祉の経済学：ニュー・リベラリズムの展開、昭和堂、2010、303
② 岩下　伸朗、マーシャル経済学研究、ナカニシヤ出版、2008、328
③ 高　哲男、暮らしのなかの経済思想－進化論的経済学入門、知新出版研究所、2007、116

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
関　源太郎（SEKI GENTARO）
九州大学・大学院経済学研究院・教授
研究者番号：６０１１７１４０

(2)研究分担者
高　哲男（TAKA TETSUO）
九州産業大学・大学院経済・ビジネス研究科・教授
研究者番号:９０１０６７９０
姫野　順一（HIMENO JUNICHI）
長崎大学・環境科学部・教授
研究者番号：００１１７２２７
岩下　伸朗（IWASHITA SHINRO）
福岡女学院大学・人間関係学部・教授
研究者番号：５０２０３３７８
荒川　章義（ARAKAWA AKIYOSHI）
九州大学・大学院経済学研究院・准教授
研究者番号：５０３０４７１２
江里口　拓（ERIGUCHI TAKU）
愛知県立大学・教育福祉学部・准教授
研究者番号:６０２８４４７８